

義理を欠かずに お歳暮・お中元を やめるマナー

近年、コスト削減の観点から「虚礼廃止」の風潮がみられます。そこで、先方への義理を欠かずに贈答を廃止する際の注意点を解説します。



株式会社EXSIA代表取締役
コミュニケーションマナー講師

松原奈緒美

ましょう。

虚礼廃止の メリット・デメリット

メリット

企業にとつての虚礼廃止は、経費削減、準備にかかる時間・コスト削減などの自社メリットとともに、先方に気を遣わせないという利点もあります。また、社内での贈答や行事には、上司から部下に対する無言の強制力が働く場合もあるため、ハラスメントの予防にもつながります。

デメリット

一方で、取引先や顧客企業との定期的な挨拶のタイミングがなくなり、営業機会の喪失につながる可能性があります。また、社内においては、贈答をきっかけとしたコミュニケーションの機会が失われるケースも考えられます。

虚礼廃止の 目的を考える

メリットにのみ注目すると、「虚礼廃止」は合理的であると思われる人も多いかもしれませんが、しかし「虚礼」とされるものは、本来は人と人、企業と企業の関係性を深める重要な役割を担っています。

たものでもありません。

そのため、ただ単に「虚礼廃止」の風潮があるから廃止するというのではなく、

虚礼廃止の目的

- ・起り得る状況の想定
 - ・先方への配慮
- について、事前にしっかりと考えおきましょう。

虚礼として検討する 贈答や挨拶

- ・虚礼として検討するものには、お歳暮、お中元
- ・その他の贈答（手土産など）
- ・季節の挨拶状（年賀状、暑中見舞いなど）
- ・バレンタインなどの行事

などが挙げられます。

これらのうち、何を廃止するのか、どこ（社外・社内）に対して廃止するのかは、企業として明確に定めておくようにしましょう。

お歳暮・お中元を 廃止する際の流れ

廃止する習慣や行事が決まり次第、先方に伝えます。最も丁寧な方法は文書（手紙）ですので、以下のポイントと例文（図表1）を参考に書いてみましょう。

日頃の感謝の気持ちを示す、お歳暮やお中元などの習慣。昨今、こうした贈答の習慣や行事を「虚礼」として「廃止」する企業が増えていきます。

本稿では、虚礼廃止を検討する企業担当者向けに、先方に失礼にあたらずに贈答や挨拶を廃止する際のポイントを紹介します。

虚礼廃止の 風潮

「虚礼」という言葉は、「見かけ

だけで実質が伴わない礼儀」を指します。たしかに、毎年贈っているから贈るといふのは、虚礼に近いくように感じます。

その一方で、これまで「お世話になった感謝」を形にしてきた場合には、「虚礼」という言葉に違和感を持つ人も、少なからずいるのではないのでしょうか。

廃止の是非については、企業ごとにさまざまな考え方があり、思いますが、まずは虚礼廃止のメリット・デメリットからみていき

● 図表1 ● 贈答廃止の例文

2023年10月吉日

お取引先各位

自社名
社長名等

弊社における贈答廃止のお知らせ

拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。
平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、この度弊社ではお歳暮・お中元などの贈答を廃止
させていただくことといたしました。今後は、感謝の思いを
これまで以上に業務に向け、皆様の期待に誠心誠意お応
えしていく所存でございます。

貴社におかれましても、弊社へのお歳暮・お中元をはじ
めとする贈答は無用にてお願いいたします。

今後とも変わらぬお引き立てを賜りますよう、お願い申し
上げます。

敬具

記

・2023年お歳暮より贈答を廃止させていただきます。

以上

担当者名
連絡先

- ・ビジネス文書の体裁で書く
- ・差出人は、社長名で出す
- ・何を廃止するのか明記する
- ・廃止の時期を明記する
- ・こちらからの廃止か、先方の贈答を遠慮するのかを記載する
- ・先方への思いや配慮を添える
- ・担当者、連絡先を必ず右下（用紙の下座）に書く

なお、用件や本文を書く際に、「虚礼」という言葉を用いると、これまでも気持ちに伴っていないかのようなネガティブな印象を与えてしまいますので、社外用の文書では表現を変更したほうがよいでしょう。

先方に連絡する
タイミングに注意

廃止を先方に連絡するタイミングも重要です。先方の準備などに十分配慮し、余裕をもって伝えましょう。たとえばお歳暮の場合は、11月に入ると先方で準備が始まるため、10月中に通知できるとよいでしょう（図表2）。

虚礼廃止後に先方から
贈答が届いた場合

虚礼廃止を通知しても、先方から贈答が届く場合があります。特に初年度は、どうしても贈ってお

● 図表2 ● お歳暮廃止のスケジュール例

時期	自社すべきこと	相手先の状況
10月	相手先がお歳暮の準備に入る前に、虚礼廃止の意思表示を相手先に伝える	
11月		11月に入ったらお歳暮の準備を開始 ・リストアップ ・品物の発注 ・挨拶状
12月	虚礼廃止の意思表示をしても届いた場合の対応を検討し、早めに社内に周知しておく	12月初旬～12月20日頃までにお届けする ・正式には対面 ・発送する場合は、挨拶状を添える
1月	届いた先へお礼をする場合は、 ・御年賀 関東～1/7、関西～1/15 ・寒中見舞い（お伺い）御年賀明け～2/4として贈る	

きたいという企業もあるかもしれませんが。そのような場合に、贈答を受け取り、次年度からご遠慮いただくように伝える

- ・受け取らず、お詫びをして返送する

のどちらの対応を取るのか、あら

はじめ決めておきましょう。受け取らないという場合は、先方が用意をしないように文書だけではなく、担当者から口頭などでもしっかりと周知しておくことが確実です。

一方、受け取る場合には、事後にお礼の気持ちを贈るかどうかでも決めておく必要があります。たとえばお歳暮の場合、同じくお歳暮での返礼では間に合わないことが多いので、年明けに御年賀や寒中見舞い（お伺い）等で用意し、次年度からご遠慮いただくよう挨拶文を添えて贈るとよいでしょう。

虚礼廃止後を
考える

ご縁のある人や企業に、日頃の感謝を伝えるきっかけとなってきたのが、お歳暮やお中元などの贈答の行事です。

企業として「虚礼廃止」を実施するならば、その分、日頃からの関係性のおかげで、先方に感謝や思いを伝える方法を考えることも大切になるでしょう。

まつばら なおみ 株式会社EXSIA代表取締役。NPO法人日本サービスマナー協会ゼネラルマネージャー講師としてプロ講師の育成も行なう。著書に『新しい生活様式・働き方対応ビジネススマナー100』（新日本法規出版）。